

令和7年度版『中学生の道徳』をご使用いただくにあたり、令和3年度版からの教材変更により教材が前の学年での既習教材と重なるものについて、下記のように差し替え教材をご用意いたしました。

つきましては、適宜ご活用いただきますようよろしくお願いいたします。

令和7年度版	差し替え教材
2年 P.24～ 「5 あなたの『生きようとする力』」	「自分の番 いのちのバトン」

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

自分の番 いのちのバトン

主題名 生命の連続性

ねらい 「自分の番 いのちのバトン」を読んで、どのようなことを感じ、考えたかについて話し合うことを通して、生命が数えきれない祖先から受け継がれ、そして次へと引き継がれていくことに気づき、かけがえのない自他の生命を尊重する道徳的心情を育む。

内容項目 生命の尊さ〔中学校D・(19)〕

生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

主題設定の理由

指導内容について 生命とはつながり、受け継がれていくものである。これを生命の連続性という。生命の連続性には、「多くの人によって支えられているもの」といった「横」の視点と、「先祖代々、受け継がれるもの」といった「縦」の視点がある。どんな生命もただ一つだけで生まれ、存在するのではなく、大きなつながりの中にあるという真理は、時に独りよがりな見方や考え方におちいる人間を謙虚にさせる。

教材について 相田みつをさんの作品を教材化したものである。ふだんは気に留めもしないことだが、よくよく考えてみると自分に至るまでの生命の連鎖は気が遠くなるほど長いものである。何世代もの間、「いのちのバトン」を受け継いできた数え切れない生命が、今の自分を支えていることに気づかせたい。また、「自分の番」の重みを感じ、生きていることのかげがえのなさについて生徒と共に考えたい。

関連内容項目

家族愛、家庭生活の充実

各教科や領域との関連

- 理科—生命の連続性
- 保健体育科—心身の機能の発達と心の健康
- 技術・家庭科—家族・家庭生活（自分の成長と家族・家庭生活）
- 総合—生命現象の神秘や不思議さと、そのすばらしさ

現代的な課題との関連

生命尊重教育

出典：相田みつを『本気』（文化出版局） 詩／編集委員会 編

教材分析

■ あらすじ

相田みつをさんの詩を教材としたものである。人は誰もが一人で生まれてきたわけではない。父と母、父と母の両親、百万人を越える数えきれない祖先たちが「いのちのバトン」をつ

ないできた。あなたも、それを受け継いでいるかけがえのない一人であり、今ここに自分の番を生きている。それがあなたのいのちであり、私のいのちである。

教材の構造 道徳上のユニ ーク	父と母で二人 ～なんと百万人を越すんです	過去無量の ～自分の番を生きている	それが あなたのいのちです それがわたしのいのちです
	生命の連続性 大いなるつながりがあるがゆえに尊い	かけがえのない人生を生きたこと	すべての生命が尊く、 かけがえのないもの

授業構想

① 主題と教材を読み解く

本時の主題は「生命の連続性」である。生命は尊いものであると頭では分かっているが、現代社会において生死を体験する機会は多くない。私たちは日々、生命が生まれては死に、死んでは生まれる世界にあるが、バーチャルな体

験ではそれを実感することが難しい。本教材では、生命の連続性について描かれている。受け継がれ次へと引き継がれている連続性の理解に加え、すべての生命が「自分の番を生きている」ことの意味を考えていきたい。

ねらいにせまる！ 生徒に考えさせたいこと

「生命の尊さ」について、どのように理解しているだろうか。

② 教材から考えること

詩を読んで、あなたはどのようなことを感じ、考えたか。

多くの先祖や多くの生命とつながっていることへの「驚き」、祖先の誰か一人でもいなかったら生まれていなかったという「感動」など、さまざまな感じ方、考え方があると考えられる。

③ 自己の生き方・人間としての生き方について

「自分の番を生きている」とはどういうことか、またどのように生きたいか。

「自分の番を生きている」ことについて意見交流を図り、考えを深めたうえで自由に考えさせる。必要に応じて、生命には限りがあるなどの視点を投げかける。

生命の連続性と「自分の番を生きる」 ことについて考える展開

[凡例] ○：発問 ◎：中心となる発問 ➡：問い返し

話し合い

	生徒の学習活動	発問と予想される生徒の反応	指導の留意点
導入	本時の学習課題を知る。	「生命が大切」とよく言われるが、なぜ大切なのか。 ・一人に一つしか与えられないから。 ・一度無くすと二度と手に入らないから。 ・両親からもらった大切なものだから。 ・多くの人たちに支えられているものだから。	生命が大切な理由を発表させるなどして、価値への方向づけを図る。
展開	教材を読む。 内容を確認する。 詩を読んで感じ、考えたことを自由に発表し合う。	みなさんの生命は一つしかないと話していたが、一人一人の先祖たちはどうだろうか。 自分を見つめて考える ○「自分の番 いのちのボタン」を読んで、あなたはどのようなことを感じ、考えただろう。 ・こんなに自分の先祖がいるなんて考えたことがなかった。 ・たくさんさんの生命が私とつながっているんだと感じた。 ・この中の誰か一人でもいなかったら、私はこの世に存在していない。 ・今、ここに生きているのは当たり前じゃないと感じた。	教材を範読する。 先祖たちの生命も一つしかないこと等を確認する。 できるだけ多くの生徒に発言を促し、感想を自由に話し合わせる。
	「自分の番を生きる」ことについて考える。	考えを深める ◎「自分の番を生きている」とはどういうことなのだろう。 ・生命を自分だけのものとして考えず懸命に生きる。 ・先祖たちの願いを感じて、自分の生命を大切にする。 ・次の代に生命をつなげるように、しっかり生きる。 ・生きてほしいという願いを子どもたちにつなぐ。 ・多くの人からいろんなものを受け継いだ自分を大切に。好きになる。 ➡「生命を大切にする」「しっかり生きる」とはどういうことだろう。 ・時間をむだに使わず、自分の将来に役立つことや誰かのために使う。 ・健康や事故に気をつけて、生命をとぎれさせないようにする。	いのちのボタンを受け継いで生きるということを自己との関わりにおいて考えさせる。 抽象的な発言に対して、「それはどういうこと?」「もっと詳しく教えて?」などと問い返す。
終末	文章化	自分との対話 ○あなたは、どのように「自分の番」を生きたいと考えるか。 自分の考えを書いてみよう。	内容を共有しないことを伝え、自らの生き方について自由に記述するよう促す。

板書例

自分の番

いのちのバトン

課題：「生命が大切」とよく言われるが、なぜ大切なのか？

先祖たちの生命も・偶然・一つしかない

こんなに自分の先祖がいがいなんて。たくさん命が私とつながっている。

誰か一人でもいなくなったら、私はこの世に存在していない。

今ここに生きているのは当たり前じゃない。

自分の番を生きる

・生命を自分だけのものとして考えず懸命に生きる。
・先祖たちの願いを感じて、自分の生命を大切にすること。
・次の代に生命をつなげるようにしっかりと生きろい生きてほしいという願いをつなぐ。

・多くの人からいるんものをを受け継いだ自分を大切に。好きになる。

・時間をもたに使わず自分の将来に役立つことに誰かのために
・生命をとぎれさせないようにな夢や目標をもって、生命を輝かせる

The diagram shows a hierarchical tree structure representing the passing of life. At the top are four circles labeled '先人' (Ancestors). Below them are two rows of circles labeled '親' (Parents) and '子' (Children). At the bottom is one circle labeled '私' (Me). Lines connect the circles, showing the lineage from ancestors down to the individual.

本展開例のポイント

■ 導入

「『生命が大切』とよく言われるが、なぜ大切なのか。」「生命がつながっているとはどういうことか。」などと問題提起して教材に入る。

■ 展開

＜あらすじの確認＞

一読しただけでは分かりにくいところもあるので、必要に応じて、一人一人の先祖もまた偶然に生まれていること、たった一つの限られた生命しかないことを確認する。

＜中心発問から＞

詩を読んで感じたこと、考えたことを話し合わせる。連続性に関わる発言が多くなると予想されるが、生命が小さな確率から生まれたこと

(偶然性)や、たった一つしかないこと(唯一性)など、幅広い視点から生命について意見交流を行い、生命がかけがえのないものであることを実感させたい。

また、「自分の番を生きる」ことについて考える場面では、抽象的な発言に問い返し、発展性（生命を輝かせて生きる、夢をもって生きる）の面についても考えられるよう促す。

■ 終末

「どのように生きるか」という内面に大きく関わるテーマのため、全体で共有する場面があると書きにくいと生徒が感じる可能性がある。生徒が安心して記述できる環境づくりに努める。

評価

■ 生徒評価の視点例

- 話し合いを通して、友達の感じ方、考え方を理解しようとしながら、生命の多面性や生きることについて考えを深めている様子が授業中の交流からうかがえる。
- 生命の尊さを感じ取りながら「自分の番を生きる」ことについて、自分自身のこれまでの経験や考えを振り返ったり、見直したりしている記述が見られる。

■ 授業評価の観点例

- 話し合いを通して、生徒に生命について多面的に考えさせ、生命を尊重することについて自己との関わりで考えを深めることができたか。
- 詩を読んで感じたことや、「自分の番を生きている」ことに対する生徒の考えを傾聴し、適宜問い返すなどして、多様な見方・考え方を全体で交流できたか。

令和7年度版『中学生の道徳』をご使用いただくにあたり、令和3年度版からの教材変更により教材が前の学年での既習教材と重なるものについて、下記のように差し替え教材をご用意いたしました。

つきましては、適宜ご活用いただきますようよろしくお願いいたします。

令和7年度版	差し替え教材
2年 P.64～ 「14 ミスター・ヌードル——安藤百福」	「初めての実験——山中伸弥」

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

初めての実験——山中伸弥

主題名 真理を探究する

ねらい 研究者として新たな可能性を探究し続ける山中伸弥さんの生き方について考えることを通して、人間には答えの分からない問題への強い探究心があることに気づき、自らの好奇心や探究心を大切にして、真理を探究していこうとする道徳的実践意欲を培う。

内容項目 真理の探究、創造〔中学校A・(5)〕

真実を大切にし、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること。

主題設定の理由

指導内容について 人間は、時に「当たり前」と信じられていたことを疑い、考え、検証することで新たなものを生み出しながら、生活を豊かにしてきた。それは「考える動物」としての人間の本質的なあり方だといえるだろう。VUCAと呼ばれる目まぐるしく変容する、不確実で、複雑で、曖昧なこれからの時代にこそ、真理を探究し、新たな生き方やあり方を模索する資質や能力が求められる。

教材について ノーベル賞を受賞した山中伸弥さんの実話である。研究を続ける山中さんを支える思いや考え方を通して、真理を大切にし、物事を探求し続けることの大切さについて考えさせられる教材である。初めての実験の様子からは真理を解き明かしていくことの喜びや興奮が共感的に伝わってくる。また、輝かしい業績ではなく、失敗や挫折、苦勞が描かれていることから、生徒は共感でき自我関与しやすい。

関連内容項目

向上心、個性の伸長／希望と勇気、克己と強い意志／社会参画、公共の精神／勤労

各教科や領域との関連

- 理科—生物の体のつくりと働き
- 総合—ものづくりの面白さや工夫と生活の発展
- 学級活動—一人一人のキャリア形成と自己実現（社会生活、職業生活との接続を踏まえた主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用）

現代的な課題との関連

キャリア教育

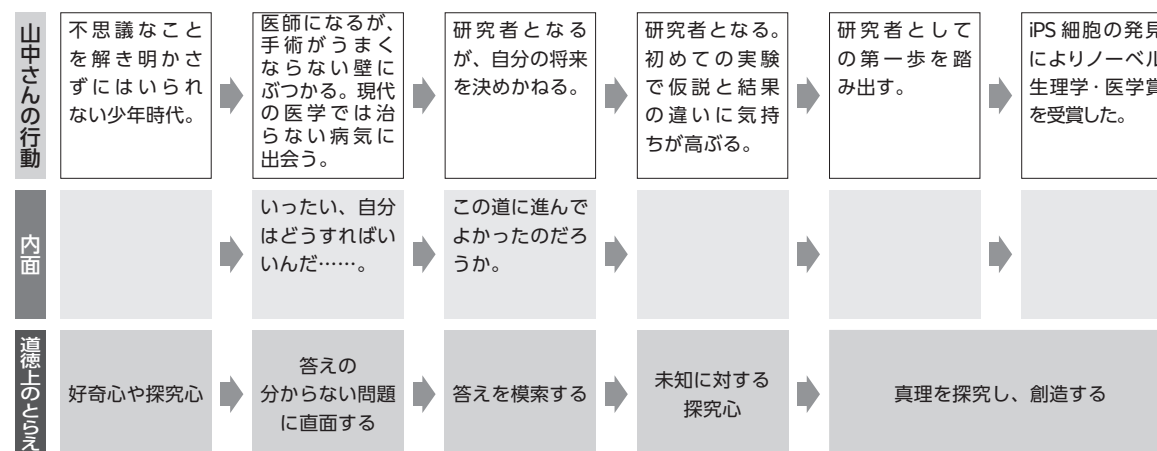
出典：編集委員会 編

教材分析

■ あらすじ

ノーベル賞を受賞した医学者、山中伸弥さんの伝記教材。小さい頃から不思議なことを解き明かすことに魅力を感じ、将来は医師になろうと考えた。しかし、大学で研修医として勤務する

も試練や挫折にぶつかってしまう。悩みながらも研究員として活動を始めたが、そこでの初めての実験で、真理を求め、物事を探究し続け、新しいものを創造しようとすることの喜びを実感し、研究者の道を歩み出す。



授業構想

① 主題と教材を読み解く

人類は真理を求め、未知に挑戦することで課題を克服し、自らの生活をよりよいものにしてきた。しかし、いざ自分たちの生活を振り返ってみれば、答えの分からない問題というのは厄介なものであり、安易な解決策を求めたり、考

えることを放棄したりすることがある。本教材では、山中さんの探究における出発点に立つまでの葛藤と苦悩が描かれる。自らの人生と医療の可能性という命題に挑む山中さんから、探究の原動力を探りたい。

ねらいにせまる！ 生徒に考えさせたいこと

真理を探究するためには、どのようなことが大切か。

② 教材から考えること

山中さんが研究者に向いていると感じたのは、どんな自分に気づいたからか。

「不思議なことを解き明かしたい」という好奇心や、医療の問題を解決したいという意欲をもって探求し続ける山中さんの生き方を、さまざまな視点からとらえたい。

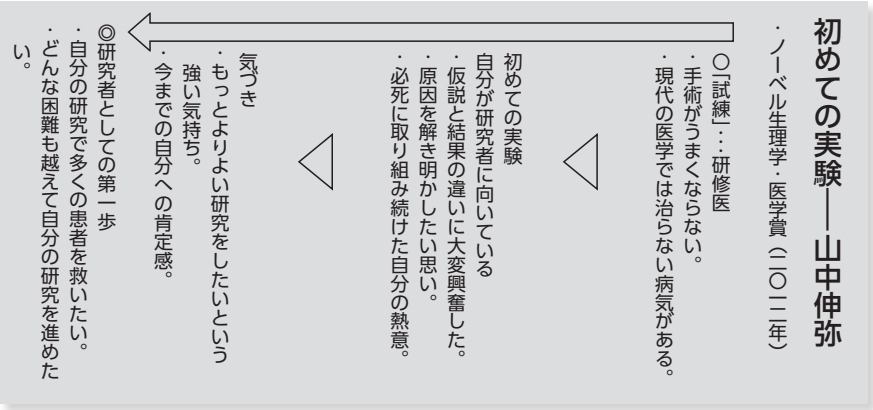
③ 自己の生き方・人間としての生き方について

あなたにも山中さんと同じよう思いはないだろうか。

医療の研究という特殊な分野のみならず、現代には答えの分からない問題がたくさんあり、それは生徒の生活や人生にもある。そのことに触れながら、自分自身の思いを見つめてみたい。

[凡例] ○：発問 ◎：中心となる発問 ➡：問い返し

	生徒の学習活動	発問と予想される生徒の反応	指導の留意点
導入	本時の題材を知る。	今日はノーベル賞を受賞した山中伸弥さんの話である。	簡単に題材について紹介し、教材に入る。 D 山中さんが実験している動画を活用してもよい。
	教材を読む。 あらすじを確認する。	研修医となった山中さんが悩み続けたのは、どうしてだろう。 ・手術がうまくならないから。 ・現代の医学では治らない病気があるから。 ・医者として誰かを救うことができないから。	教材を範読する。 山中さんが「医療の力で人の命を救う」という命題に向き合っていたことを押さえる。
	初めての実験での山中さんの気づきについて考える。	自分を見つめて考える ◎山中さんが初めての実験を通して「自分が研究者に向いている」と感じたのは、どのような自分に気づいたからだろう。 ・仮説と結果の違いに大変興奮し、その原因を解き明かしたいという自分の強い思いに気づいたから。 ・実験中の突然の変化があっても、必死に取り組み続けた自分の研究に対する熱意を実感できたから。 ・早くこの謎について研究したいという自分。 ➡この「気づき」は、山中さんにどのような力を与えただろう。 ・もっとよりよい研究をしたいという強い気持ち。 ・今までの自分への肯定感。 ・こういう未知を一つずつ解決すれば人を救えるかもという希望。	実験に対する必死さや、結果からの興奮をもとに山中さんの思いを想像させる。
	研究者としての一歩を踏み出した山中さんの思いを考える。	考えを深める ○山中さんは、どのような思いで研究者としての第一歩を踏み出したのだろう。 ・自分の研究で多くの患者を救いたい。 ・どんな困難も越えて自分の研究を進めたい。 ・この探究心を大切にしていこう。 ・謎を一つずつ明らかにしていこう。	山中さんが研究を続ける理由を考えることを通して、探究と創造について考えを深めていく。
終末	文章化	今日の授業を通して、感じたことや考えたことを書いてみよう。	答えの分からない問題に出会ったとき、生徒自身がどう感じるかを振り返らせたい。



本展開例のポイント

■ 導入

2012年にノーベル生理学・医学賞を受賞した山中さんを知るところから始める。その際に教科書にある山中さんの紹介文を活用したい。

■ 展開

＜あらすじの確認＞

山中さんが、小さい頃から「不思議なことを解き明かすこと」が好きだったということは個人の性格の問題ととらえられやすい。同じような気持ちを、多かれ少なかれ生徒たちももっていないかという視点で押さえておく。

＜中心発問から＞

「初めての実験」のように、仮説通りではないこと、うまく成果が出ないことがたくさんあ

る。粘り強く真理を求め続けた日々の先に、iPS細胞の発見があったことを想像させながら、山中さんの生き方について考えさせたい。

■ 終末

ノーベル賞を受賞した山中さんは「自分とは遠い存在」だと思うかもしれない。しかし答えの分からない問題は生徒の生活や人生にもあることに触れて、そのようなときに山中さんと同じような思いがないかを振り返る。答えが分からないことを面倒に感じたり、考えるのが嫌だったりする気持ちも共感的に受け止め、それが人間であるということにも理解を深めたい。そのうえで、何とか答えを求めたいという気持ちはないかを再度問う。

評価

■ 生徒評価の視点例

- 不思議なことを解き明かし続けた山中さんの生き方をさまざまな視点からとらえ、粘り強く探究心をもって探究することについて考えを深める様子が授業中の交流からうかがえる。
- 現在の自分自身の好奇心や探究心について振り返り、真理を探究して新しいものを生み出すことについて自己との関わりで考えを深めている記述が見られる。

■ 授業評価の観点例

- 山中伸弥さんの生き方から、葛藤や困難を乗り越え、探究心をもって物事の真理を探究することの大切さについて考えを深める授業が適切に構成されていたか。
- 学級や生徒の実態に応じて意見を交流させて、新しいものを生み出すことについて多面的・多角的に考えさせることができたか。

令和7年度版『中学生の道徳』をご使用いただくにあたり、令和3年度版からの教材変更により教材が前の学年での既習教材と重なるものについて、下記のように差し替え教材をご用意いたしました。

つきましては、適宜ご活用いただきますようよろしくお願いいたします。

令和7年度版	差し替え教材
2年 P.106～ 「22 よみがえった良心」	「魚の涙」

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

魚の涙

主題名 自分に恥じない生き方

ねらい 筆者の主張を参考にしながら、いじめには道徳上どのような問題があるかを考えることを通して、さまざまな人間の弱さや醜さ、強さや気高さの存在に気づき、自己の良心に従って、人間らしさを大切に生きようとする道徳的実践意欲を培う。

内容項目 よりよく生きる喜び〔中学校 D・(22)〕

人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと。

主題設定の理由

指導内容について 誰の心の中にも弱さや醜さがあり、それがときに「いじめ」という悲劇を生み、かけがえのない命を奪うこともある。「気高く生きようとする心」とは、自己の良心に従い、人間性に外れずに生きようとする心であり、自己の行為の善悪を自覚し、悪を退けることを求める心の動きである。いじめという悪を憎み、退けようとする心が、自分たちの心にあることをしっかりと見つめていきたい。

教材について 自身の体験を含むさかなクンのメッセージから、いじめを許さない心の強さをもつことの大切さについて考える教材である。明るく親しみやすいキャラクターとして知られているさかなクン。いじめる子を止められなかったが、いじめられている子に寄り添うことはできたという体験談は、多くの生徒が共感的に受け止められるだろう。いじめのない世界にするために大切な心について考えを深めたい。

関連内容項目

自主、自律、自由と責任／思いやり、感謝／友情、信頼／公正、公平、社会正義

各教科や領域との関連

●学級活動—学級や学校における生活づくりへの参画（学級や学校における生活上の諸問題の解決）

現代的な課題との関連

いじめ防止の指導、人権教育

特別な配慮事項

いじめ・生徒間のトラブルなど、学級や生徒の実態に応じて適切な配慮を行う。

出典：さかなクン『さかなのなみだ』（二見書房）

教材分析

■ あらすじ

メジナという魚は、狭い水槽に入れるといじめられっ子が出る。いじめられっ子を救い出しても、新たないじめられっ子が出てくる。逆に、いじめっ子を水槽から出しても新たないじめっ

子が生まれる。筆者は自らが体験した「いじめ」を魚の世界に重ねながら語る。自分がいじめられた子のそばにいることしかできなかったと振り返りながら、今を生きる子どもたちに「広い世界へ出よう」とエールを送っている。

教材の構造	人間について	筆者について	人間について	筆者自身の体験
	魚と同じように、小さな世界に閉じ込めるといじめが起きる。	突然始まったいじめにわけがわからなかったけれど、「なんで？」と聞けなかった。	小さなかごの中から広い空の下、広い海に出ることができる。	仲間外れにされた子とよく魚釣りに行き、学校から離れて一緒に糸を垂れていた。
道徳上の問い	人間の弱さや醜さ		人間の強さや気高さ	

授業構想

① 主題と教材を読み解く

本教材で筆者は「いじめ」という現象が魚でも起きるということを書いている。この点でいえば、人間は魚と同類である。もしくは“同じレベル”といえるかもしれない。しかし本当にそうだろうか。それでいいのだ

ろうか。動物的な本能で他者を攻撃し、弱いものを淘汰していくことが、私たち人間としてのあり方なのだろうか。そのような生き方を、内なる自分がどう感じるのかを、生徒と共に考えていきたい。

ねらいにせまる！ 生徒に考えさせたいこと

いじめのない世界にするためには、どのような心が大切なのか。

② 教材から考えること

特に狭い閉じた世界だといじめが起きやすいのはどうしてか。

自分たちが考えた「いじめ」の心理について共有する。筆者自身の弱さや私たちへのエールをもとに、筆者自身が「いじめ」をどのようにとらえているかを参考にする。

③ 自己の生き方・人間としての生き方について

いじめのない世界にするために、あなたはどのような心を大切にしたいか。

筆者の思いを理解したうえで、自分自身の判断に照らして考えさせる。必要に応じて「なぜそう思うのか」を問うことで、自己内対話を促していく。

[凡例] ○：発問 ◎：中心となる発問 ➡：問い返し

	生徒の学習活動	発問と予想される生徒の反応	指導の留意点
導入	本時の題材を知る。	メジナという魚を水槽に入れたら、1匹を攻撃し始める。攻撃される1匹を取り出してあげると、解決するだろうか。	🎧 メジナの画像を見せ、展開をイメージさせて教材に入る。
展開	教材を読む。 印象に残った点について考える。	この話で印象に残ったのは、どのようなところだろう。 ・ 人間の世界も魚の世界もいじめが起こる。 ・ 狭い世界に閉じこもるのはだめ。 ・ 広い空の下、広い海に出ればいい。	教材を範読する。 内容がいじめ問題と関係していることを押さえる。
	いじめの構造をもとに、いじめが起きる原因や背景を考える。	マイ・プラス Step1 ○いじめが起きるのはどうしてだろう。狭い閉じた世界だと起きやすいのは、なぜだろう。次の三つの視点で、話し合ってみよう。 【いじめている人の心は】 ・ 自分が優位に立って安心したい。 ・ 自分の思い通りにしたい。 ・ 相手のことがうらやましい。 ・ 自分もイライラを発散したい。 【いじめを見て面白がっている人の心は】 ・ 自分がしたくてもできないことが目の前で起きている楽しさ。 ・ 自分に被害が来ないか、内心ハラハラ。 ・ いじめっ子への同調。 【いじめを見て見ぬふりをする人の心は】 ・ 助けた方がよいことは分かっている。 ・ 関わりたくない、拒絶感。 ・ 関わるのが、怖くてしかたない。 ➡筆者の心の中は、どうだったのだろう。 ・ いじめは虚しいだけ。 ・ 広い視野をもてば、心が楽になる。 ・ いじめを止めることは難しい。 ・ 寄り添うことで相手は安心できる。	いじめの構造を示し、三つの立場に着目させる。 マイ・プラスの問いについて、それぞれの立場から意見を出させ、比較したり共通点を考えたりすることで、人間の弱さが表出していることに気づかせる。
	いじめのない世界をつくるために、自分が納得する生き方について考える。	マイ・プラス Step2 ◎いじめのない世界にするために、あなたが特に大切にしたい心は何だろうか。 ・ 自分を大切にすること。 ・ 相手を思いやる心。 ・ いつでも正しい判断ができる心。 ・ 強い心。 ・ 苦しんでいる人を助けようとする心。 ・ 悪いことを悪いと言えること。 ・ みんなが同じ思いをもてること。 ・ 自分自身が負けないこと。	初発の感想や教材内の筆者の言葉に着目させ、いじめを解決する糸口を見いださせる。
終末	文章化	今日の授業を通して、感じたことや考えたことを書いてみよう。	いじめの解決のための自分自身の考えと生き方を照らし合わせる。

魚の涙

【この話で印象に残ったことは】

・ どの世でもいじめが起こる。

・ 狭い世界に閉じこもるのはだめ。

・ 広い海に出ればいい。

【いじめている人の心は】

・ 自分が優位に立って安心したい。

【いじめを見て面白がっている人の心は】

・ 自分がしたくてもできないことが目の前で起きている楽しさ。

【いじめを見て見ぬふりをする人の心は】

・ 助けた方がよいことは分かっている。

・ 関わりたくない、拒絶感。

【いじめのない世界にするために、あなたが特に大切にしたい心は何だろうか】

・ 自分を大切にすること。

・ 相手を思いやる心。

・ いつでも正しい判断ができる心。

・ 強い心。

本展開例のポイント

■ 導入

いじめについて直接的に問題提起する場合は、「いじめがよくないと知っていても、なくならないのはどうしてだろう」といった問いかけが考えられる。

■ 展開

＜あらすじの確認＞

人間の世界でも魚の世界でもいじめがあることを、筆者は「もったいない」ことで広く物事を見ることが大切だという。そのようなことを初発の感想からとらえられるといい。

＜中心発問から＞

「自分本位の考え」の中にある怖さやイライラ感、いじめは許されるべきものでないと分

かっていても止められない人間の弱さがあることに気づかせる。そのうえで「いじめのない世界にするために特に大切にしたい心は何か」と問うことで、自分自身が納得できる考え方を見いだしていきたい。

■ 終末

学級や生徒の実態にもよるが、いじめの問題については自分の意見が言いにくい場合がある。自分自身の内面と向き合わせ、考えをまとめさせる時間を十分にとるためには記述を用いるのが有効である。

評価

■ 生徒評価の視点例

- 友達の考えを聞きながら、いじめの根底にある心をさまざまな視点からとらえ、人間の弱さや醜さ、強さや気高さについて考えを深めている様子が授業中の交流に見られる。
- いじめがなくなることの難しさを理解しながら、それでもいじめのない世界を目指すことについて、自分の思いや考えを見つめている様子が発言や記述に見られる。

■ 授業評価の観点例

- いじめの構図を参考にそれぞれの立場の心情を考えることで、いじめにある人間の弱さや醜さ、それを克服したいという心について考えを深める授業が適切に構成できたか。
- 生徒がいじめについて意見交流し、考えを深めることができるよう、学級や生徒の実態に応じた配慮を行いながら、適切な発問や学習活動を選択できたか。

令和7年度版『中学生の道徳』をご使用いただくにあたり、令和3年度版からの教材変更により教材が前の学年での既習教材と重なるものについて、下記のように差し替え教材をご用意いたしました。

つきましては、適宜ご活用いただきますようよろしくお願いいたします。

令和7年度版	差し替え教材
2年 P.144～ 「30 地下鉄で」	「バスと赤ちゃん」

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

バスと赤ちゃん

主題名 思いやりの心の温かさ

ねらい お母さん、運転手、乗客のそれぞれが互いのことを大切にしている思いについて考えることを通して、人と人が互いを思いやる心の温かさに気づき、人間愛に満ちた、温かい思いやりの心を大切に作る道徳的心情を育む。

内容項目 思いやり、感謝〔中学校 B・(6)〕

思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。

主題設定の理由

指導内容について 人は誰しも一人では生きていけない。他者と共に生きていかなければならないものである。そのためには他者を尊重しながら、思いやりの心で接し、寄り添い、支えようとする心のあり方が必要だ。こうした人間の本質的なあり方は、いつの時代においても変わることはない。温かい人間関係とよりよい社会の実現の根底を形づくる思いやりの心を、大切に育んでいきたい。

教材について 混雑したバスの中で泣きだした赤ちゃんを巡る出来事が描かれた教材。母親、運転手、乗客たちが互いに配慮し思いやる光景を通じ、心の温かさ、社会や人間関係のよいありようを見ることができ、読後にすがすがしく温かい心の輪を広げる。また、それぞれの思いについて考えることで他者を思いやることの意味を知り、自分は多くの人の思いやりに支えられていると気づかされる教材である。

関連内容項目

相互理解、寛容／遵法精神、公德心

各教科や領域との関連

●学級活動―日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全（自他の個性の理解の尊重、よりよい人間関係の形成）

現代的な課題との関連

社会参画に関する教育

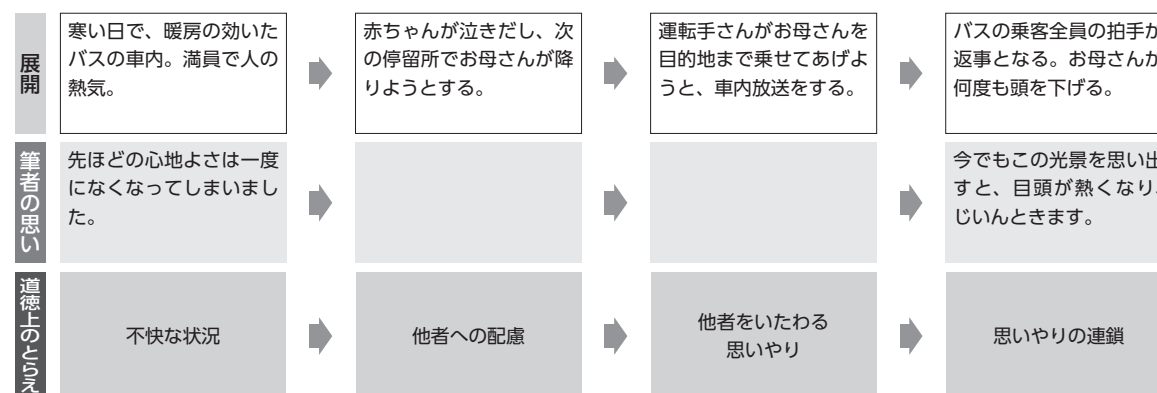
出典：知久茂子『心にしみるいい話』全国新聞連合シニアライフ協議会編（講談社）

教材分析

■ あらすじ

満員のバスの中で泣きだした赤ちゃんが迷惑になると思ったお母さんは、目的地の前で降りようとする。そのことを察した運転手が、マイクのスイッチを入れて乗客に「赤ちゃんは泣くのが仕事です。一緒に乗せていてください。」

とアナウンスする。乗客の一人の拍手につられて、バスの乗客全員の拍手が起こり、お母さんは、何度も何度も頭を下げた。筆者にとってこの光景は、思い出すたび目頭が熱くなる出来事である。



授業構想

① 主題と教材を読み解く

本時の主題は「思いやりの心の温かさ」である。思いやりとは、相手へ「思い」をやること。心の花束の贈り物であり、望ましい人間関係を築くためには、きわめて大切なものである。しかし、実際にその心を行為に移すためには、小さな勇気も必要である。

本教材では、お母さん、運転手、乗客の思いやりの心が互いに響き合い、温かい雰囲気をつくり出している。この思いやりのもたらす温かさを生徒と共有しながら、小さな勇気を育む時間としたい。

ねらいにせまる！ 生徒に考えさせたいこと

思いやりの心が生み出す温かさとは、どのようなものだろうか。

② 教材から考えること

乗客全員の拍手には、どんな思いが込められていたのだろうか。

乗客全員の拍手に込められた思いを、多面的・多角的に考えさせる。また、登場人物それぞれの考えや関わり合いから生まれた思いやりの温かさに触れさせたい。

③ 自己の生き方・人間としての生き方について

この話で心に残ったのはどの場面で、どうしてそう思ったか。

登場人物のそれぞれに感じた温かさ、その意見を交流させたい。自分の考えを発表したり友人の考えを聞いたりして、思いやりの温かさについて深く考える機会とする。

それぞれの登場人物の思いやりに触れる展開

[凡例] ○：発問 ◎：中心となる発問 ➡：問い返し

	生徒の学習活動	発問と予想される生徒の反応	指導の留意点
導入	教材の場面を想像する。	この話は、満員のバスの中での出来事である。満員のバスの中は、どんな状況だろう。 ・人がいっぱいだと窮屈そう。 ・息苦しくて暑い。	イメージをもたせるために、教科書の挿絵や満員のバスの画像を提示する。
展開	教材を読む。 あらすじを確認する。	満員のバスで、お母さんが「待ってください。降ります。」と言ったのはなぜだろう。 ・赤ちゃんが泣き止まないから。 ・迷惑になると思ったから。	教材を範読する。 バスを降りようとしたお母さんの思いを押さえる。
	お母さんと運転手さんとのやり取りについて話し合う。	自分を見つめて考える ○運転手さんは、どうしてお母さんに「目的地はここですか？」と聞いたのだろう。 ・お母さんの様子が何か変だと思ったから。 ・お母さんが急に「降ります」と言ったのが不思議だったから。 ・お母さんは赤ちゃんが泣き止まないから降りようとしていると察したから。 ➡聞かれたお母さんは、どう思っただろう。 ・どうしてそんなこと聞いてくれるのかな？ ・自分のことを心配してくれたのかな。	声をかけた運転手さんがお母さんの心の中を推し量っている気づかいについて想像させる。
	乗客の拍手に込められた思いについて考える。	考えを深める ◎乗客全員の拍手には、どんな思いが込められているのだろう。できるだけたくさんあげてみよう。 <お母さんへ> ・降りなくてもいいよ。乗って行ってね。 ・赤ちゃんの泣き声は迷惑じゃないよ。 ➡お母さんは何に何度も何度も頭を下げたのだろう。 <運転手さんへ> ・気づいてくれてありがとう。 ・アナウンスしたことがすばらしいよ。 ➡どんなところがすばらしいのだろう。 <乗客へ> ・みんな同じ気持ちだよ。赤ちゃんとお母さんは乗せていこう。 ・最初に拍手してくれた人、ありがとう。 ➡最初の拍手にはどんな意味があるのだろう。	「思いやりの心」という言葉でまとめるのではなく、あえて具体的な思いをたくさんあげることで、ねらいにせまりたい。 出された意見を、<○○へ>と分類したり、板書を図式化したりして整理する。
終末	筆者の心情に共感する。	○筆者がこの光景を思い出すと、今でも目頭が熱くなり、じいんとくるのは、どんなことが心にしまっているからだろう。 ・お母さん、うれしかっただろうなあ。 ・みんなの優しさが忘れられない。 ・人間の温かさが広がっていったなあ。	人情の素晴らしさに深く共感させたい。 自由な発言を促し、受け止める。時間がなければ省略する。
	文章化	自分との対話 ○あなたがこの話で心に残ったのは、どんなところだろう。 今日の授業で「いいな」と思ったことを書いてみよう。	教材の中や友人の発言からなど、自由に書かせる。

板書例



乗客

やさしさ

思いやりのつながり

拍手

素晴らしい

みんな同じ気持ち

最初の拍手ありがとう

乗って行ってね。
迷惑じゃないよ
気づいてくれて
ありがとう



「一緒に乗せていって」

「降りにくてもいいよ」

「どうして急に」

「目的地はここですか」



満員のバス（暑い、苦しい）

バスと赤ちゃん

「降ります。」

・赤ちゃんの泣き声

・乗客に迷惑

本展開例のポイント

■ 導入

文章中の満員のバスの状況を想像させる。地域によって状況が異なって認識されるかもしれないので、挿絵や都市の満員バスの画像を示すことで、息苦しさ等をイメージさせたい。

■ 展開

<あらすじの確認>

比較的把握しやすいストーリーである。心温まる余韻を残して範読する。細かくあらすじを確認することはせずに、お母さんが降りようとした場面から話し合う。

<中心発問から>

お母さんと運転手さんの関わりについて話し

合ったあと、乗客全員が拍手した思いについて考える部分を中心発問とする。それぞれの登場人物の思いやりの心を想像させ、たくさんの意見をあげさせたい。運転手さんがアナウンスしたすばらしさ、それに最初に応える一人の乗客のすがすがしい拍手の意義については気づかせたいところである。

■ 終末

この教材や授業での話し合いから、生徒たちは「いいな」と感じた部分があるだろう。この教材の場合は差し支えない範囲で、何人かに記述したことを読んでもらってもよいだろう。

評価

■ 生徒評価の視点例

- 拍手に込められた思いやりの心を、母親に向けたものや運転手、他の乗客に向けたものなど、さまざまな視点でとらえ、互いの関わり合いの温かさについて考えていることが授業の様子からうかがえる。
- 思いやりの心のよさや、それらが関わり合いながらつくりだす温かさの大切さについての自分の考えが記述や発言に見られる。

■ 授業評価の観点例

- それぞれの登場人物の思いを共感的に理解し、また意見交流を通してさまざまな視点で考えながら、人が人を思いやる心の温かさについて考えを深める授業が適切に構成できたか。
- 生徒の発言を傾聴し、共感的に受容しながら生かすことで、教材から受けるそれぞれの感動を大切にしたい授業が構成できたか。

令和7年度版『中学生の道徳』をご使用いただくにあたり、令和3年度版からの教材変更により教材が前の学年での既習教材と重なるものについて、下記のように差し替え教材をご用意いたしました。

つきましては、適宜ご活用いただきますようよろしくお願いいたします。

令和7年度版	差し替え教材
2年 P.148～ 「31 加山さんの願い」	「町内会デビュー」

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

町内会デビュー

主題名 社会参画と社会連帯

ねらい 明が町内会の共同作業に取り組んで感じたことや考えたことを共感的に理解することを通して、互いに助け合い励まし合う社会連帯の大切さに気づき、社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努めようとする道徳的实践意欲を培う。

内容項目 社会参画、公共の精神〔中学校C・(12)〕

社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること。

主題設定の理由

指導内容について よりよい社会を築くためには、多くの人々の力が必要である。そのため、社会が抱える課題の解決を人任せにするのではなく、主体的に行動することが求められる。加えて、他の人々と互いに助け合い、励まし合いながら協力する必要もある。こうした社会参画と社会連帯を実現するためには、関連するさまざまな道徳的価値の理解を深めながら、自己のあり方や生き方を見つめていかなければならない。

教材について クマの出没という地域社会の課題を解決するため、町内会での共同作業への参加を母から無理やり申し渡された主人公の明。はじめは後ろ向きだったが、町内会の人たちと共同作業をしていくなかで次第に気持ちに変化していき、高齢者にかわって重いものを運ぼうとするなど、自ら課題を見だし、解決しようとする。同年代の明に自分を重ねながら、社会参画や社会連帯について考えたい。

関連内容項目

自主、自律、自由と責任／思いやり、感謝

各教科や領域との関連

- 社会科—地理：日本の様々な地域（日本の諸地域／地域の在り方）
- 技術・家庭科—家族・家庭生活（家族・家庭や地域との関わり）
- 総合—身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々
- 学級活動—一人一人のキャリア形成と自己実現（社会参画意識の醸成や勤労観・職業観の形成）
- 生徒会活動—ボランティア活動などの社会参画
- 学校行事—勤労生産・奉仕の行事（地域社会への協力、学校内外のボランティア活動など）

現代的な課題との関連

社会参画に関する教育／キャリア教育／防災教育

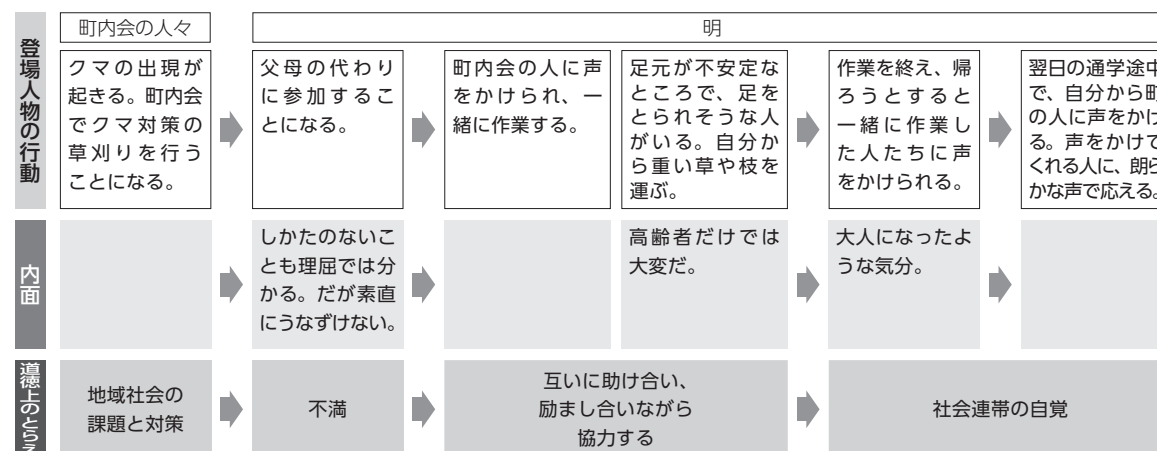
出典：『中学校道徳 読み物資料集』（文部科学省）

教材分析

■ あらすじ

町内会では、クマの出現を防ぐための対策が話し合われ、共同作業で草刈りと掃除をすることになった。各家庭から一人参加するという決まりであるため、明は母から作業に参加するよ

う頼まれる。はじめは嫌がっていた明だが、作業を進めていくうちに、自分から行動するようになる。作業が終わって、一緒に働いた人たちから声をかけられた明は「大人になったような気持ち」を感じるのだった。



授業構想

① 主題と教材を読み解く

社会参画や社会連帯という言葉は知っていても、近所付き合いが減ってきている昨今、地域の人と関わる機会も減ってきている。そのため、よほど意識的に活動をしている人でない限り、「社会参画と社会連帯」を自分たちの生活の中

で実感するという体験は、大人でも少ないのではないか。本教材では、タイトルの通り「町内会デビュー」する同年代の主人公、明の姿が描かれている。明の意識の変化を共感的にとらえながら、社会と関わることについて考えたい。

ねらいにせまる！ 生徒に考えさせたいこと

課題を解決し、よりよい社会にしていけるには、どのようなことが大切か。

② 教材から考えること

明が「なんだか大人になったような気持ちでした」のは、どうしてだろうか。

子どもと大人の境目にいる中学生にとって、「大人になった」とはどんな場面で感じられるのだろうか。社会の一員として自覚をもつように変化していく明の姿から考えさせたい。

③ 自己の生き方・人間としての生き方について

あなたには社会の一員としてできることがあるだろうか。

自分たちの地域や社会を振り返りながら、社会の一員としての自分の役割や責任を自覚し、よりよい社会の実現に自分ができることを具体的に考える時間をとりたい。

	生徒の学習活動	発問と予想される生徒の反応	指導の留意点
導入	本時の題材を知る。	今までに、町内会の作業に参加したことはあるだろうか。 ・ 町内の美化活動。 ・ 地域の祭りの準備や片づけ。	自分が地域の中でどのような役割を担っているのか、客観的にとらえさせる。
展開	教材を読む。 あらすじを確認する。	母に共同作業を頼まれたとき、明はどのような気持ちだったのだろう。 ・ 知らない人の中で参加するのは嫌だ。 ・ 中川家代表なんて荷が重い。 ・ 大人に混じっての作業は恥ずかしい。	教材を範読する。 しづしづ引き受ける明の気持ちを押さえる。
	自ら進んで作業しようとして変化する明の気持ちを考える。	自分を見つめて考える ○明は「よし。」と言って草や枝を集めて運び始めたとき、どのようなことを考えていたのだろう。 ・ 高齢者には重労働だから、自分がやろう。 ・ 危ないから自分がやらなきゃいけない。 ・ 自分も役に立ちたい。 ・ 自分も運ぶことで、皆を助けたい。	明の行動から、自分のことだけでなく、自分から課題を見だし、行動する明の様子に気づかせる。
展開	社会の一員として自覚し始めた明の気持ちを考える。	考えを深める ◎明が「なんだか大人になったような感じがした」のは、どうしてだろう。 ・ 周りの人の役に立つことができたから。 ・ 自分の頑張りをみとめてもらえたから。 ・ 地域の人々の役に立つことができた実感したから。 ・ 自分も一人前に成長したような気がしたから。 ・ 自分も地域の一人として自覚することができたから。 ・ 地域の大人たちと仲間になれた気がしたから。 ・ 地域のためにみんなと協力できたから。	母に共同作業を頼まれた明は「まだ、中学生」と言っていたが、作業を終えて「大人になったような気持ち」と感じている。この共同作業が明にもたらした影響、変化とは何かを考えさせる。周囲の人と関わりをもち始めるきっかけとなる。
終末	文章化	これまでにどのような形で地域や社会と関わってきただろう。また、これからはどのような形で関わっていききたいだろう。自分の考えを書いてみよう。	自分の地域や自分の生活を振り返って記述を促す。

町内会デビュー

○明の気持ちの変化

「僕はまだ、中学生だよ。」

↓素直にうなずけない

不安、不満、恥ずかしい

「よし。」と言って草や枝を集めて運び始める。

・ 高齢者には重労働。
・ 自分にできることをしたい。
・ 自分も他の人の役に立ちたい。

← なんだか大人になったような気持ち

地域の一員としての自覚

周りの人の役に立つことができた達成感。

○これからどのように社会と関わっていききたいか？

本展開例のポイント

■ 導入

地域や社会との関わりについて、具体的に今までの自身の行動を振り返り、主人公の明を自分に置き換えて考えられるような導入にしたい。

■ 展開

＜あらすじの確認＞

明の気持ちの変化に注目させられるよう、不満げな場面での心情を確認しておく。「まだ中学生」という言葉に焦点を当ててもよい。

＜中心発問から＞

母に町内会の仕事を頼まれた明は「僕はまだ、中学生だよ。」と言っていたが、作業を終え「なんだか大人になったような感じがした」と気持ちが変化する。この変化とは何かを考えさせ

る。そのためには、明の行動と心情の変化を丁寧に整理していくことが必要である。「自信がついた」「成長を感じた」などの反応も予想されるので、その場合は「どうしてそう思えたのか」「どのような自信か」などと問い返し、社会と関わることのよさや大切さを実感する明の心情を具体的にとらえさせたい。

■ 終末

導入ではこれまでの経験を聞いたが、終末ではこれからどのように社会と関わっていきたいかを考えさせたい。社会との関わりというとなかなか思いつかないこともあるかもしれないが、この教材のような身近なことから始めるきっかけを作れるよう、教師が意識しておく。

評価

■ 生徒評価の視点例

- 友達の考えを聞きながら、明の心情をさまざまな視点からとらえ、社会参画や社会連帯のよさや大切さについて考えを深めている様子が授業中の交流からうかがえる。
- これまでの自分の生活や体験を振り返ったり、学習を踏まえて今後の自分自身について考えたりしながら、社会に参画していくことについて考えている様子が見られる。

■ 授業評価の観点例

- 町内会デビューで明が感じたことや考えたことを共感的に理解することで、互いに助け合い励まし合う社会連帯の大切さについて考えを深める授業が適切に構成されていたか。
- 社会と関わることについて、自分事としてとらえることができるよう、地域の課題を提示したり、生徒の体験を振り返らせたりするなど発問や学習活動を工夫できたか。

令和7年度版『中学生の道徳』をご使用いただくにあたり、令和3年度版からの教材変更により教材が前の学年での既習教材と重なるものについて、下記のように差し替え教材をご用意いたしました。

つきましては、適宜ご活用いただきますようよろしくお願いいたします。

令和7年度版	差し替え教材
3年 P.126～ 「25 尊い玉子」	「三六五×十四回分のありがとう」

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。

三六五×十四回分のありがとう

主題名 家族の深い絆

ねらい 佐江子さんとお母さんとの関係やそれぞれの思いについて考えることを通して、愛し合い、支え合う家族の絆のすばらしさを感じ、家族に対して感謝と尊敬の念をもって敬愛する道徳的心情を育む。

内容項目 家族愛、家庭生活の充実〔中学校C・(14)〕

父母、祖父母を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと。

主題設定の理由

指導内容について 無私の愛情を注ぎ、成長を見守ってくれる家族は、かけがえのない存在である。家族の大切さについて考える機会は多くはないが、人生の折々で、その存在の大きさに気づかされるだろう。それは家族を失うという体験かもしれない。もっと大切にすべきだったと深く後悔することもある。道徳科において家族という存在を見つめる授業は、自立していく生徒にとって大切な時間となるだろう。

教材について 親子の絆について深く考えさせられる教材だ。心臓疾患をもつ佐江子さんが、大手術の前日、母親に書いた手紙には、支えてくれたことへの感謝とこれからは自分がお母さんを支えると綴られた。佐江子さんの死後に母親が綴った手紙と合わせて、病と闘いながら明るい将来を夢に描き続けた佐江子さんと母親の姿から、親子の信頼と愛情の深さに気づき、家族への敬愛の念を深めることができる。

関連内容項目

思いやり、感謝／生命の尊さ

各教科や領域との関連

●技術・家庭科—家族・家庭生活（自分の成長と家族・家庭生活）

現代的な課題との関連

生命尊重教育

特別な配慮事項

生徒の家庭環境に留意して、必要に応じて適切な配慮を行う。

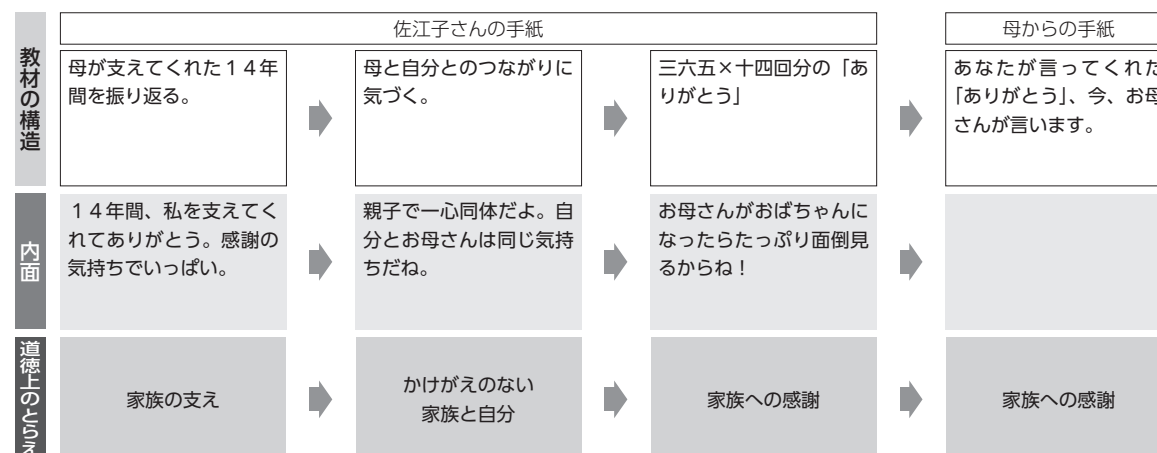
出典：柳橋佐江子「お母さんへ」『PHP 平成元年6月号』（PHP研究所）

教材分析

■ あらすじ

14歳の柳橋佐江子さんが、大手術を控えて書き残した母への手紙である。母に言いたいことは「14年間、私を育ててくれてありがとう」。家庭や学校での日常を思い出しては、いつも母

に支えられてきたことを振り返る。そして母がいかに自分のことを理解してくれていたかを綴り、自分たちは「親子で一心同体」だと表現する。最後に「ありがとう」と、今度は自分が母を支えたいという思いでしめくくるのだった。



授業構想

① 主題と教材を読み解く

さまざまに家庭の事情はあるが、互いに支え合う家族には絆がある。血のつながりという以上に、共に家庭を築き、支え合う間柄に生まれる思いは存在し、それはやはり「愛」だろう。だが残念なことに、あまりにも身近で、当たり

前の存在であるがゆえに、ふだん省みることがないのもまた家族という存在であろう。本教材に描かれる共に生きようとする親子の絆が心を打つ。親子の双方向の愛に、家族という関係の本質を見ることができるのではないか。

ねらいにせまる！ 生徒に考えさせたいこと

家族とは、どのような関係なのだろう。

② 教材から考えること

「三六五×十四回分のありがとう」の言葉にどんな思いが込められているか。

佐江子さんとお母さんは、確かに特別な事情がある関係だが、手紙に込められている思いには家族という関係の本質が表れている。生徒自身の言葉で語れるよう展開したい。

③ 自己の生き方・人間としての生き方について

あなたはこれから家族とどのような関係を築いていきたいだろうか。

佐江子さんとお母さんの親子の絆、家族の愛情について考えたうえで、教材の感動を生かして、自分自身と家族との関わりについて見つめる機会とする。

[凡例] ○：発問 ◎：中心となる発問 ➡：問い返し

	生徒の学習活動	発問と予想される生徒の反応	指導の留意点
導入	本時の学習課題を知る。	みなさんにとって家族とは、色で表現するとどのようなイメージだろうか。理由も合わせて考えよう。 ・ピンク：あったかい　・青：明るい ・灰色：うるさく言われる　・黄：優しい	家族へのイメージを想起させ、価値への方向づけを図る。
展開	教材を読む。 内容を確認する。	この手紙で心に残ったところはどこだろう。 ・「365 × 14 回分のありがとう」の言葉。 ・「また一緒にコーヒーを飲みたいな」の言葉。すごく仲良し。 ・「私の気持ち、分かっていない！」共感する。 ・「手術がんばろうね」の言葉。	教材を範読する。 手紙を読んで心に響いた部分を発表し合う。
	佐江子さんが手紙に書いた思いについて考える。	自分を見つめて考える ◎「三六五×十四回分の『ありがとう』という言葉には、佐江子さんのどのような思いが込められているのだろう。 ・お母さんのおかげで今まで幸せだったよ。 ・お母さんと私はいつも一緒だよ。 ・力を合わせて病気と闘おうね。 ・病気が治ったら私がお母さんを支えるよ。	家族への愛情、感謝、支えに応えようとする心情に気づかせる。
	佐江子さんとお母さんの存在から家族の存在について考える。	○佐江子さんは、なぜ手術の前にこの手紙を書こうと思ったのだろうか。 ・感謝の気持ちを表したかった。 ・大好きなお母さんに自分の思いを届けたい。 ・お母さんと一緒なら手術を乗り越えられる。 考えを深める ○佐江子さんとお母さんの関係を、あなたはどのように思うだろう。 ・お互いにかげがえのない関係。 ・自分と同じかそれ以上に大切な存在。 ・どんなときも味方でいてくれると思う。 ・一心同体で支え合う関係だと思う。 ・心の支えとなり頑張れる存在。 ・励まし合い頼れる存在。	書かずにはいられない感謝の思いや親子の絆の深さに気づかせる。
終末	文章化	自分との対話 ○あなたは、これから家族とどのような関係を築いていきたいだろう。 考えたことを書いてみよう。	教材の感動を生かして、自分の思いを見つめる機会とする。

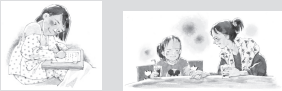
三六五×十四回分のありがとう
家族の存在

お母さんの思い
「がんばれ」
生きてほしい。
一緒にいるから大丈夫だよ。
お母さんも同じ気持ちだよ。
自分自身も励ました。

佐江子さんの思い
お母さんのおかげで幸せだったよ。
お母さんと私はいつも一緒だよ。
力を合わせて病気と闘おうね。
治ったら私がお母さんを支えるよ。
私が生きてきたすべての日、お母さんがいたから幸せだったよ。

佐江子さんにとってのお母さん
大好きでかけがえのない存在。
自分と同じかそれ以上に大切な存在。
優しく助けてくれる存在。
一心同体で支え合う存在。
心の支えとなり頑張れる存在。
励まし合い頼れる存在。

お母さんの手紙
お母さんも同じ



本展開例のポイント

■ 導入

「家族」という学習課題を提示して教材に入る。感動的な教材なので、手の込んだ導入とするよりも、あっさりとして終わらせて進むとよい。

■ 展開

＜あらすじの確認＞

心に残ったことを生徒に聞きながら、どのようなことが書いてあったかを確認するとよい。

＜中心発問から＞

佐江子さんとお母さんとの関係について「いいな」「うらやましい」「感動した」といった反

応があるかもしれない。その場合は「どのようなところが?」「どうしてそう思った?」などと問い返して、理由を聞くようにする。二人の関係性を、生徒の言葉で表現させるように意識するとよい。

■ 終末

学びを生かして、家族と自分との関わりを考えさせたいが、生徒の家庭環境に配慮が必要な場合がある。今、共に暮らす家族ではなく、将来自分が中心に築いていく家庭をイメージさせてもよい。

評価

■ 生徒評価の視点例

- 佐江子さんにとってのお母さんの存在やお母さんにとっての佐江子さんの存在について考えたことから、感謝と尊敬の念をもって敬愛する家族の存在について考えを深めている様子が授業の交流からうかがえる。
- 自分の感じ方や考え方を振り返りながら、自分と家族との関わりについて考えている様子が見られる。

■ 授業評価の観点例

- 佐江子さんと母との関係やそれぞれの思いから、愛し合い支え合う家族の絆のすばらしさについて考えを深める授業が適切に構成されたか。
- 複雑な家庭環境にあるなど配慮を要する生徒に適切に対応しながら、授業のねらいにせまることができたか。